考古学教育の二十年

藤井直正

一　はしがき

今年、平成八年は、わが大手前女子学園が、現在の大阪市中央区大手前の地に創設されてより五十年、また夙川の畔、その名もゆかしい西宮市御茶家所町の一かくに大手前女子大学が開学してより三十年の佳き年に当たる。

昭和五十一年からこの学園に奉職させていただいた私の経歴も、早いものですでに二十年をこえることになった。思い起こしてみると、故川勝政太郎先生のご推せんで、昭和五十一年四月から、大手前女子大学の非常勤講師として考古学の講座を担当し、つづいて昭和五十二年四月からは史学科の専任講師に採用していただいた。

以来二十年余、この間、昭和五十五年には助教授に、さらに昭和五十九年からは教授に昇任させていただき今日に至っている。学園五十年の歴史の中では五分の二、大学三十年の歴史の中では三分の二という歳月であるが、私の担当科目である考古学の分野を中心に、私なりの抱負と方向を持って二十年間を過ごしてきたつもりである。

創立当時、大学のキャンパスは四階建の本館と、これにつながる二階建の学生ホール、それに旧研究棟の三棟に過ぎなかった。昭和五十一年に私がはじめて非常勤講師として、週に一度（本務の勤務先の都合で月曜日の第一限）出講した時の教室は本館二階、当時B教室（の

ちA二二教室と改称）でスタートした。

以後、志願者がふえると共に飛躍的発展をつづけ、昭和五十四年には健身館（体育館兼講堂・学生ホール）、昭和五十五年には健学院（図書館）、つづいて昭和六十年には美芸院（美学・美術史学科実習棟）、昭和六十二年には聚学院（大教室棟）といった状況で校舎の建設がつづき、キャンパスが拡充されて行った。赴任以来の十年は、こうした発展途上にあった大学と共に歩み、そのすがたをつぶさに見てきたのであるが、くわしいことは私自身執筆させてもらった一文、「高度成長のとき開学された女子大学」（『大手前女子学園記』昭和六十二年）にゆずりたい。

平成七年一月十七日の払暁、未曽有の大地震がこのキャンパスを揺るがした。東大阪市の自宅で大きな揺れに目をさましたが、これまで体験したことのない地震であり、しばらくは上半身を起こしたままで立ち上ることができなかった。

テレビの電源を入れて、震源地が明石海峡であること、阪神間の市街地や淡路島の北部に甚大な被害の及んでいることを知った。この日は卒業論文の提出日である。いつものように九時には家を出て出勤する予定であるが、ともかく学校の様子を知りたい。しかし自宅の電話はまったく通じない。家から一歩出たところにある公衆電話でやっと学校に通じた。「しばらく待機するように」ということと卒業論文の提出日が延期されたことを聞いてホッとする。それから後は喰い入るようにテレビの画面を見ていた。この日の夕方であったと思う。突然、倒壊している大学本館の建物が映った。何の説明もなかったが、なんとあの校舎が……。それから後の心の動揺は言葉では言い表わすことができない。阪神間に住まれている先生方や学生達のことを思うと気が気でなかったが、茫然としたまま数日を過ごした。学校からの連絡をまつまでもなく自分の眼でたしかめることを思い立ち、阪急西宮北口の駅から三キロの道のりをたどって学校にたどりつき、その惨状を見たのは一月二十一日のことであった。

話を戻して、十年前にも増して、全国各地での発掘調査がさかんに行なわれ、遺跡や遺物の発見のニュースは新聞の紙面やテレビの映像を通じて報道され、考古学への関心は一そう高まってきている。

全国的に大きな話題となった佐賀県の吉野ヶ里遺跡は、全域が保存されて特別史跡となり、みごとな史跡公園に整備されて多くの人びとが訪れている。一方、本州最北端の青森県では、三内丸山遺跡というこれまでまったく予想もされなかった縄文時代の集落の全貌が発掘調

査によって明らかになり、縄文時代そのものの見直しに迫られるといったさまざまな資料の検出がつづいているのである。

これに加えて、各地における発掘調査に呼応して資料館や博物館がつくられ、趣向をこらした展示会が開催され、シンポジウムが催されるなど、まさに空前の考古学ブームの到来といっても過言ではない。

こうした世相を反映してか、関西の私立大学、中でも女子大学では数少ない史学科を持つ、わが大手前女子大学への志願者は多く、在校生の考古学への関心度は高い。このことは毎年私のゼミを希望する学生の数の多いことにも表われているが、史学科の中で唯一人、考古学を担当している私にとっては大きな責任を痛感している。非力にして無力な私には重荷ではあるが、それなりの努力はしてきたつもりであり、今後も一層の努力を続けたいと思う昨今である。

ちょうど十年前、本学に勤務することになって十年に当たる昭和六十一年、『大手前女子大学論集』第二十号に、「考古学教育の十年」と題した小文をのせたが、本稿はそれにつづいて、その後の十年のあゆみと現況を記してみた。ご高覧をいただければ幸である。

二　私の考古学教室

大手前女子大学史学科における考古学関係講座の推移については、「考古学教育の十年」（『大手前女子大学論集』第二十号、昭和六十一年）に要約しておいたが、その後における変化を記しておきたい。

平成四年度より、本学においても文部省からの指示を承け、大学の自己評価とカリキュラムの検討に取り組んできたが、史学科でも再三学科会議を開き改訂・再編成の作業を進めてきた。

その中での大きな改訂として、概説科目を一回生から受講するようにしたこと、必修科目の枠組をはずしたこと、この二つをあげることができる。

「考古学」は、昭和四十四年度の史学科開設以来、私が赴任後の昭和五十四年度からは「考古学概説」と改称したが、ずっと必修科目であった。平成六年度入学者からこれを改め、選択必修科目とした。ただし美学・美術史学科の専門科目とされており、また博物館学課程の履

修科目でもあるため、史学科の学生だけでなく、美学・美術史学科の学生はもとより、英米文学科・日本文化学科の学生でも博物館学芸員の資格取得のために受講する者を加えると毎年の受講者は相当数に上る。史学科の学生の多かった年には教室に入り切らず二コマを設けてこれに対処したこともあった。

次に平成七年度より新しく設けたのが「考古学演習」である。国史学・東洋史学・西洋史学は、当初からそれぞれ概説・特講・演習が設けられていたが、考古学は一講座しかなかった。史学科の発足当時は補助学としての位置であったからなのであろうが、概説・特講・演習・実習まで揃えた現状からみると昔日の思いである。ただし、担当しているのが私一人というのは心もとない。複数の教員を備える必要を痛感しているのであるが、実現するのはいつの日のことであろうか。

それはそれとして、本学では従来、卒業論文については、四回生になって題目を選び、それに応じて指導教員を決めると共にゼミを編成してきた。しかし史学に関する論文を一年足らずの日数で作成させることは無理であるという意見が強く、数年前から三回生の後半、十二月の上旬にガイダンスを行なって題目を早く選ばせ、一月には指導教員を決める方向で進めてきた。

今回の改訂ではこれをもう一歩進め、三回生で履修する演習と四回生での卒論演習を一貫したものとし、演習を通じて、三回生中の早い時期に卒業論文の題目を決め、卒業論文の作成に必要な史・資料の扱い方や研究方法をこの中で指導するというシステムを確立することにした。

そこで史学科の学生は、三回生になった時点で、

国史学
東洋史学
西洋史学
地理学
考古学

の五コースのうち一つを選ばせることにし、三回生の演習は二科目を必修、そのうちどちらか一つは最終的に卒論演習につなぐというシス

テムであり、平成八年度の三回生（二十九期生）から施行しているが、完全な実施は平成七年度入学の二回生（三十期生）からとなる。これに伴って、これまで演習科目のなかった地理学と考古学には、平成七年度から、それぞれ「地理学演習」と「考古学演習」を開講した。

1　考古学概説

昭和五十一年以来、十年一日のごとく、変わることなく、Ⅰ考古学の定義、Ⅱ考古学の歴史、Ⅲ考古学の資料、Ⅳ考古学の研究法、Ⅴ考古学の時代区分、について一通り話をし、基礎的なことを理解させた上で、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・歴史時代という、日本考古学の時代区分に従って各時代の重要な事項と問題点を概説することにしている。また最近のように、遺跡の発掘調査が全国的規模で行なわれ、日日さまざまな遺跡や遺物の発見がつづいている状況の中で、考古学が現代社会の中でどのような役割を果たしているのかということについて考えることも大切であり、トピックとしてこれらのニュースを取り上げ、解説を加えることにしている。

因みに年度末のテストには、問題の一つとして、毎年「考古学が現代社会の中で果たしている役割について、具体的な例をあげて述べなさい。」という問題を出すことにしているが、一つ二つ、このことについてよく理解している学生の答案を掲げておくことにしたい。

史学科Gさん　私たちの先祖にあたる人たちのくらしや文化について、遺跡や遺物から調査・研究をすることができる。古墳は権力者の墓であるが、あの大きさや副葬品を見ても、当時の権力者の〝権力〟というものがいかに大きいものであったかということがわかる。こうして権力者を中心とした社会構造というものが確立し現代の社会構造へと発展してきたのである。つまり、今の自分たちの生活の基盤となるものが考古学によって明らかにされるのである。

史学科Sさん　三内丸山遺跡のようにボランティアの人が見学者に説明してくれるような親切な場合がある。これはうれしいことだ。これによって考古学という学問を知らない人達も享受することができるのだから。考古学という世界を社会の中で広めて行くということが最近活発になり、それを浮かび上らせているのが博物館等も合わせた遺跡公園である。

考古学を未知の世界の解明に終らせるのではなく、個人個人に文化財の大切さを知らせて行く、そのことを果たすことのできる世の中になってきたのではないだろうか。

共に考古学の現状を把握しているすぐれた答案である。

2　考古学特講

考古学概説を受講した上で、さらに考古学に強い興味と関心を持っている者に対して開講している科目で、内容は主として私自身が日ごろ研究のテーマとしている事項であったり、特別に関心を持っている諸問題を中心に講義をつづけてきた。受講者は多く、毎年一五〇名をこえる人数で盛況であるが、ここ十年間に取り上げてきたテーマを列記すると次の通りである。

年度	テーマ
昭和六一年度	近世考古学の展望
〃 六二年度	〃
〃 六三年度	寺院・墳墓・経塚
平成　元年度	文字と書の歴史
〃　二年度	〃
〃　三年度	文学を考古学で読む
〃　四年度	歴史考古学アラカルト
〃　五年度	〃
〃　六年度	日本廻国風土記（一）
〃　七年度	〃（二）
〃　八年度	〃（三）

この中で、平成六年度からはじめた「日本廻国風土記」は、今年で三年目であり、あともう一年かけて完結させるつもりであるが、これについて少し解説してみたい。

現在わが国の行政区画は、いうまでもなく一都（東京都）・一道（北海道）・二府（京都府・大阪府）・四十三県であり、都道府県とよばれ

ている。このうち北海道は古くは蝦夷地とよばれ、日本の統治下に編入されたのは明治二年（一八六九）のことであった。沖縄県も、歴史的には琉球国であったが、慶長十四年（一六〇九）以後、島津藩の支配となり、廃藩置県で鹿児島県の所属としたが、明治十二年（一八七九）に沖縄県が設置された。

何年かかったのか、数えてみたことはないが、私自身、全国都道府県をともかく一巡した。秋田県だけがのこっていたのであるが、今年の八月末に出かけてこれも果たした。

ところで、日本は古くから六十六国とされている。大化の改新によって施行されることになった律令制度下の国郡制においては五十八ヵ国であったが、平安時代の天長元年（八二四）、全国を六十六国と二島（種子島・屋久島）を版図にしたのがその起源とされている。

回数・度数はともかく、全国六十六国のうち、東海道に属している国の一つであり房総半島の南端に位置する安房国を除いた諸国は、壱岐・対馬・および隠岐・佐渡をふくめてともかく知らず知らずのうちに廻国することができた。中世、鎌倉時代の末から室町時代にかけて、法華経六十六部を書写してこれを一国に一部ずつ納経してまわる「六十六部聖」のことは、中世の文献にも記され、その遺例も知られている。また、近世になると「六十六部廻国供養塔」がさかんに造立された。これにあやかりたいとか、とくに願いをこめたわけではないが、いつのころから日本全国を廻ってみようという気持が芽生えたことは確かである。

そこで考古学特講の講義であるが、「日本廻国風土記」と名付け、一国乃至二国を一時間に充て、国ごとの特徴やその地域を舞台として展開した歴史を概説し、私自身、興味をもった遺跡・遺物を対象にしながら現地で見聞したこと、そこから考えることのできる考古学上の諸問題について話をするという構成を採っている。

一例をあげると、これは昨平成七年度の一コマであるが「信濃国」の場合を述べてみよう。まず信濃の生んだ偉大な考古学者、故藤森栄一氏のことを紹介した。最近復刻版の出た『かもしかみち』は、戦後間もないころ、考古学に憧れた少年達を魅了した名著であり私もこれを耽読した思い出がある。話は藤森氏の師である森本六爾氏のことから、唐古・鍵遺跡のこと、森本氏を中心とする東京考古学会が弥生文化の究明に果たした役割など考古学史の一こまを説明した。

話はかわって数ある藤森栄一氏の著書には『遙かなる信濃』という随想集（昭和四五年、学生社刊）がある。その冒頭には「信濃の国の

うた」という小文がのせられている。

「信濃の国」という歌がある。

昭和四十四年、長野県の県歌に指定された。

ひどく、むずかしい歌詞で、おまけに、これでもかというほど、おらが国さの事象がつめこまれているので、若い人々にはとうていなかなか理解されにくい代物である。

ところが、この歌は県歌になる前から、青年会でも、婦人会でも、いや、東京の県人たちのちょっとした集まりにも、酒が入ればきっと歌われた。人々は会合の終りを、さあ、そろそろ「信濃の国」にするじゃ、といって、かたづをのむのである。

「信濃の国は、十州に、境つらなる国にして、聳える山はいや高く、流れる川はいや遠し」にはじまって、風土・産業・歴史・偉人にいたる十節、それはながくむずかしかったが、県人なら知らぬものはない。そして終ったとき、異境（ママ）にいる県人は、涙していつまでもフィナーレを惜み、それぞれに、古きよき信濃に思いをはせるのだった。（以下略）

実は私自身、この「信濃の国」の歌を、ここに述べられているような状況のもとで耳にした経験があるのである。それは史学科十七期生の高杉（現姓、加藤）昌子さんの結婚披露宴の席でのことであった。高杉さんは静岡県御殿場市の出身で、在学中は考古学研究会の一人として部長をつとめ、先般報告書を刊行した加古川市の石棺調査の際には大活躍をした。教育実習で母校の静岡県立御殿場高校にお世話になった時には同校を訪問したこともあって、私にとっては印象の深い卒業生の一人である。

この高杉さんが、在学中から親しかった先輩の片井（現在、伊藤）裕子さんの紹介で長野市の県立高校で体育の教師をしている青年と結婚することになり、これに招待されて長野県佐久市に出かけ、披露宴に列席した時のことである。

こうしたことから、「信濃の国」の歌は私にとって忘れられない話題となったが、その後またこれに解逅したのである。それは愛知県岡崎市に出かけた時のことで、同市の博物館に展示されている、古典的名著として知られている『日本風景論』の著者、岡崎市出身の、かの志賀重昂博士のコレクションの中に、「信濃の国」の歌詞を書いた屏風を見つけたのである。

志賀重昂博士と「信濃の国」がどうしてつながるのか、以来、私にとって一つの宿題として脳裡をはなれなかったのであるが、昨平成七

年四月に平凡社から出版された、井出孫六氏の『信州奇人考』にのせられている「信濃の国――うたの来歴」を読んで氷解した。その内容は長くなるのでここでは割愛する。

講義ではこのいきさつを説明した後、ようやく入手した「信濃の国」をカセットテープで聞き、歌に詠まれた風土を下地にしながら和田峠の黒曜石、白馬岳から流れ下る姫川産出の翡翠、更埴市に所在する積石塚として有名な森将軍塚古墳、天竜川に沿って北上する稲作文化等、信濃国の特徴的な考古学の事象に話は及ぶのである。

この講義の内容は、各時間とも受講学生の中から有志をつのり、カセットテープによる録音とその書き起こしをしてもらっている。すでにかなりの分量になっているが、いずれ六十六国のすべての話を終えた段階で、できれば私自身が満六十六歳を迎える前後には一冊の本としてまとめてみたいと思っているが、果たしてその念願を達成することができるであろうか。

3　考古学実習

考古学の基礎的技術を習得させるため、昭和五十八年度から開講した科目で、当初は受講学生が三十名程度であったが、年々受講希望者がふえ、平成七年度には九六名、平成八年度には一〇六名という驚異的な数字となった。実習科目としてみた場合、この数字は異常であるが、昨今の考古学ブームを端的に反映する事象であるのかも知れない。

しかし、実際にこれを担当している者にとっては大へんなことで、差し当たって今年度は二コマをつくり、受講生を二分して対処することにしているが、来年度以降の進め方については、改善をしなければならないと考えている。

教室での学習は、このように受講学生が異常に多いことや、時間的制約もあって、毎週各時間の進め方に苦慮している。当面、基本的技術の習得を目標として、

。遺物整理の作業

洗滌・注記・接合から実測の初歩

拓本の初歩

資料カードのつくり方

。報告書ができるまで

報告書の見方とつくり方

等を中心に実物資料を使っての実習を行なっている。

こうした教室での室内作業のほか、考古学の技術は、発掘調査現場における野外での作業が不可欠であるが、現在の状況においてこの機会を得ることは容易ではない。

昭和六十年度から六十三年度にかけては、本学が伊丹市の委託を受けて実施した「有岡城跡・伊丹郷町の発掘調査」があり、平成元年度から以降現在も継続している「有岡城跡・伊丹郷町発掘調査の資料整理」がある。この事業については、卒業生から調査員を選出し、在校生を合わせてチームを編成して作業を進めているが、考古学実習の受講生を参加させてきた。また、私自身が外部の機関から依頼を受けて実施した発掘調査にも、また平成元年五月には、史学研究所に文化財調査室が設置され、大学として外部機関の調査を受託する体制が整えられたが、これらの現場ももちろん考古学実習のフィールドとして活用してきた。

こうした遺跡の発掘調査のほか、私自身が企画し、考古学実習の受講学生全員を動員して取組んだ作業として、「猪名野神社の石灯篭調査」がある。

猪名野神社は伊丹市宮ノ前一丁目に所在する伊丹郷町の氏神である。旧街道に面した石鳥居から北へつづく参道の両側と、中門を入った境内各社殿の前には、多数の石灯篭が並んでいる。その総数は、調査の結果九十七基に上ることがわかったが、地方の小社としてこれだけの石灯篭のあるところはめずらしい。

また、刻銘をみると、とくに参道両脇にあるものは、寛永・寛文・延宝・天和といった、江戸時代初期の年号をもっているものが目につき、「一文字屋」「猪名寺屋」「豊嶋屋」等、屋号のつく人名や、「上嶋」「小西」「大塚」等、酒造業者として有名な屋号・苗字が目につき、一見してこれらの石灯篭が、酒造業者によって寄進されたことを物語っているのである。

こうしたことから、これらの石灯篭が、いつ、どういう人びとによって寄進されたのかということをしらべることによって、伊丹郷町、

とくに地場産業である酒造業の盛衰が、氏神への石灯篭の寄進という行為を通じて知ることができ、伊丹郷町の歴史を考える史料として役立てることができるのである。

こうした観点から、この調査を考古学実習の課題として取上げることとし、境内全域における石灯篭の配置図を作成すること、各石灯篭の実測図を作成すること、拓本によって銘文を判読すること等の作業を行なった。

この調査の成果は、伊丹市立博物館から刊行されている『地域研究いたみ』第十七号（昭和六三年三月）に収録されているが、近世考古学の一つの方向を示す試みであると自負している。

余談であるが、去る平成七年一月十七日の阪神・淡路大震災では、すべての石灯篭が倒壊し、悲惨な状態になっていた。罹災後直ちに、松下基明宮司および氏子各位のご尽力でみごとに再建され、損壊した部分は別石を使って補塡されているが、先の調査記録は罹災前の状況を知る上で貴重な資料となった。

この実績が引き金になったのか、平成四年度には、伊丹市立博物館から、同館の事業として進められている荒牧地区史の編さんに関連して、「荒牧地区の文化財調査」の委嘱を受けた。伊丹市荒牧に所在する天日神社・西教寺・容住寺・共同墓地等にのこされている石造遺物・在銘遺物の調査が主な仕事であるが、考古学実習受講学生全員を参加させ、これに従事した。

この成果は『荒牧郷土史』（平成七年三月刊）に収録されている。この地区も阪神・淡路大震災では甚大な被害を受け、天日神社の石鳥居が転倒し、容住寺本堂は倒壊寸前、西教寺本堂は全壊した。このため壁に貼られていた祈祷札・寄進札・納経札等はすべて失われてしまい、この時の調査記録が唯一の資料となった。

これにつづいて、平成八年度には伊丹市鴻池地区から『鴻池村史』編纂の話がもち上り、三ヵ年事業として本学史学研究所が委託を受けてこれに当たることになった。私の担当は〝文化財〟であるが、早速企画したのが鴻池地区に所在する鴻池神社・慈眼寺・墓地等に所在する石造遺物の調査である。今年の夏期休暇中、延十日間を充て、グループを編成し、各遺物の実測図の作成と、拓本による銘文の判読を実習の作業として行なった。この作業は今後も継続して実施する予定である。

考古学実習の受講学生には、日ごろ身近なところで行なわれている発掘調査の見学や、現地説明会に参加するなど、できるだけ多くの機

会を自分でつくって、発掘作業の実際を体得するよう指導している。しかしこれだけでは不十分であり、受講学生が急激に増えた平成六年度から、夏期休暇中の五日間を宛てて考古学実習の場をつくり、各自の希望に応じて実習場所をえらび、これに参加することを義務づけている。

実習場所は、先に述べたような、私自身あるいは大学として委託を受けている事業の中での仕事に参加させることのほか、東大阪市や伊丹市のように、私と直接・間接につながりのある教育委員会に依頼して、実習の場と機会を用意していただくことを考えた。さらに学生自身が居住地の教育委員会に直接おねがいをして、関係の施設や機関で行なわれている発掘調査に参加する機会をつくることも指導している。

各地の教育委員会に奉職されている、本学の卒業生や私自身の縁故をふくめた埋蔵文化財担当諸氏のご協力と、本学学生への懇切なご指導に対し、紙上ではあるが御礼を申しあげたい。

平成八年度からは、それまで一手におねがいをしていた伊丹市教育委員会に加えて、それぞれ卒業生が嘱託あるいは臨時職員として奉職している尼崎市・芦屋市・三田市の各教育委員会にも、とくに依頼して実習の場を用意してもらった。

平成八年度における考古学実習の実施状況は次の通りである。

考古学実習実施場所一覧（平成八年度）

実習場所	所在地	実習内容	参加者数
枚岡神社	東大阪市出雲井町	平成五年度より藤井が委嘱を受けて実施している作業で、同社に所蔵されている書籍・典籍・古文書・記録・什器・絵画・工芸などの点検と目録作成を行なっている。本年度は土蔵の清掃を実施した。	一一
東大阪市立郷土博物館	東大阪市上四条町	山畑古墳群の見学、測量の基本実習、土器の洗滌、「小さなまるい鏡」の展示準備、鬼虎川遺跡発掘調査現場の見学	五
伊丹市、鴻池地区	伊丹市鴻池	鴻池村史編さんに伴う文化財調査として鴻池神社・慈眼寺に所在する石造遺物・在銘遺物の実測・拓本を行ない資料カードを作成する。	一八

文化財調査室	伊丹市稲野短期大学内	伊丹市の委託により実施している「有岡城跡・伊丹郷町調査」報告書作成に伴う資料整理・実測作業に参加。	一〇
伊丹郷町遺跡	伊丹市	伊丹市教育委員会による発掘調査に参加、有岡城跡の見学、伊丹郷町内の法巌寺境内ほか、発掘現場の作業に従事させてもらう。	一二
尼崎市文化財収蔵庫	尼崎市栗山町	主として土器の洗滌作業に従事、収蔵庫内での各種の作業を見学する。	九
芦屋市・寺田遺跡他	芦屋市三条町	芦屋市教育委員会による発掘調査に参加、芦屋市三条町、寺田遺跡、小阪家住宅跡等の現場の作業に従事させてもらう。	六
三田歴史資料収蔵センター	三田市屋敷町	主として遺物の洗滌作業に従事、三田市内遺跡の見学、収蔵庫の展示作業の手伝い。	三

なお、個人別に実習を受入れていただいた機関は次の通りである。

府県名	機関名
静岡	静岡県埋蔵文化財調査事務所 浜松市埋蔵文化財調査事務所
福井	福井県立朝倉氏遺跡資料館 福井県埋蔵文化財センター
滋賀	滋賀県埋蔵文化財センター
京都	向日市埋蔵文化財センター
大阪	大阪府文化財調査研究センター 東大阪市文化財協会 阪南市教育委員会

兵庫	神戸市立埋蔵文化財センター 太子町教育委員会 三原郡埋蔵文化財調査事務所 明石市教育委員会
愛媛	愛媛県埋蔵文化財センター
高知	高知県埋蔵文化財センター
山口	小野田市歴史民俗資料館 山口県埋蔵文化財センター

全国各地における埋蔵文化財行政の現状から、発掘調査の件数は増加の一途をたどり、これに対処するため、都道府県ならびに市町村では考古学専攻学生の就職が求められている。こうした状況を反映して埋蔵文化財関係職員の求人が意外に多い。

本学においても希望者はあるが、各大学の専攻学生に互して採用試験を受けて正式職員となることは、女子大学というハンディキャップもあって容易ではない。

こうした希望者に対する指導は早い時期から行なうことと、学生自身としては、専門知識と技術の習得が必要であり、学生自身の自覚はもとより強力な指導が要求される。この場合、考古学実習の果たす役割は多大であり、本学史学科としてこれに対処することは喫緊の課題ということができるのである。

4　考古学演習

平成七年度から開講した科目で、私としても模索の段階である。『風土記』を教材に選び、本文の講読をしながら、風土記に記されている地域を対象とし、遺跡・遺物・すなわち考古学的資料を合わせて、当該地域の古代史を考える方法を理解することを目標としている。平成七年度は『播磨国風土記』、平成八年度には『播磨国風土記』ののこりと『出雲国風土記』をテキストとして、学生一人一人に分担させて講読と解説をするという方法で進めているが、学生達には好評で、風土記の世界への関心が高まってきている。

三　大学による発掘調査

本学が外部機関からの委託を受けて実施している調査のうち、伊丹市に所在する「有岡城跡と伊丹郷町の発掘調査」については、多くの機会に紹介し、前稿の「考古学教育の十年」に遺跡の概要と経過をくわしく記した。従って本稿では重複をさけて省略する。この一連の調査の中で、昭和六十二～三年に実施した「宮ノ前地区市街地再開発に伴う調査」は、平成五年度から六ヵ年継続事業として、改めて伊丹市からの委託を受けて、調査資料の整理と報告書作成の作業を逐年進めてきた。すでに報告書としては、『有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ』を平成七年三月に刊行したが、あと三年余、平成八年度にⅤ、平成十年度にⅥの二冊を刊行して平成十一年三月をもってようやく完結するという、長期にわたる大事業となった。

伊丹市からの委託事業とは別に、昭和六十二年以後、公共機関および民間団体の依頼を受け、その委託により、阪神間諸都市に所在する遺跡を対象に、発掘調査を担当・実施してきた。主要なものについて一覧表を掲げておくことにしたい。こうした状況に対し、これを積極的に学内の研究活動の一環として組み入れ、学生の考古学実習の場として活用するため、史学研究所に文化財調査室を設置することとなり、平成元年五月から発足した。表に掲げた調査のうち、平成元年五月以後については文化財調査室として担当したものである。

外部機関の委託による発掘調査

（　）内は概報・報告書の名称

年度	事業名	調査概要	委託者
昭和六二年度	共同住宅建設に伴う、堺柳之町遺跡の発掘調査	堺市柳之町東一丁、堺環濠都市遺跡内で共同住宅建設の計画があり、五五〇平方メートルについて発掘調査を行なった。上下二層にわたる生活面を検出し、中世末から近世に及ぶ大量の土器・陶磁器・瓦片が出土した（『堺・柳之町』）。	高木とし子氏 高木　紀子氏

昭和六三年度	高層共同住宅の建設に伴う兵庫津遺跡の発掘調査	神戸市兵庫区御崎本町、兵庫津遺跡内で高層共同住宅建設の計画があり、敷地一五〇〇平方メートルについて発掘調査を行なった。近代・近世を合わせて三層の生活面、〝須佐の入江〟と考えられる汀線の一部を検出し、大量の土器・陶磁器が出土した（『兵庫津』）。	長谷工コーポレーション
昭和六三年度	圃場整備に伴う遺跡の存在確認調査	兵庫県氷上郡氷上町で実施される圃場整備事業に伴い、同町鴨内および稲畑二地区における遺跡の存在確認調査について兵庫県教育委員会を通じて依頼があった。調査団を編成して調査を行なったが、鴨内地区では縄文土器、稲畑地区では弥生時代中期の遺構・遺物を検出した（『鴨内・稲畑』）。	兵庫県氷上郡・氷上町教育委員会
平成　元年度	クリスチャンセンター建設にともなう郡家遺跡の発掘調査	日本基督教団兵庫地区では、神戸市東灘区御影中町にクリスチャンセンターを建設する計画が進められているが、敷地が郡家遺跡の範囲内であり、発掘調査を実施、古墳時代の畑作遺構・住居跡、弥生時代の方形周溝墓等を検出した（『郡家遺跡』）。	日本基督教団兵庫教区
平成　二年度	共同住宅建設に伴う打出小槌遺跡の発掘調査	芦屋市打出小槌町における共同住宅建設に伴う発掘調査で、近代・近世・中世にわたる五層の遺構面を検出し、犂による牛耕の痕跡をのこす水田を確認した。	木村伊太郎氏
平成　三年度	共同住宅建設に伴う下山手通遺跡の発掘調査	神戸市中央区下山手通七丁目における共同住宅建設に伴う発掘調査で、古墳時代の土器を伴う遺構、明治時代の土拡・水路、昭和時代の作業遺跡を検出、記録を作成した。	栄泉不動産株式会社

この表に掲げた調査のうち、堺・柳之町遺跡、兵庫津遺跡、郡家遺跡の出土遺物は、それぞれ大量に上るが、調査の委託を受けた個人・会社・機関から大学の教材として活用するよう寄贈していただいている。これより先に実施した大坂城三の丸跡の出土遺物等と共に、現在は短大キャンパスD棟の文化財調査室に保管しているが、これらの中から教材となる遺物を選択し、いずれはPE棟に開設する資料室に展示することを考えている。

四　卒業生の動向

大学に在学中、考古学に関心を持ち、発掘調査や遺物整理作業に従事した経験を生かして、卒業後も文化財関係の仕事に就職している者も相当数に上る。各機関の正式職員となることは容易でないが、調査員・嘱託といった形で採用され、業務の一翼を担って活躍していることは心強い限りである。私の知っている範囲内で一覧表を作成してみたが、遺漏があるかも知れない。こうした卒業生が毎年巣立って行くことは、大学にとっては大きな実績の一つであり、在校生にとっては大きな励ましであるが、昨年度・今年度には考古学実習に当たって協力してもらった。

期	卒業年次	氏名	勤務先	備考
9	昭和五三年	田根裕美子	松江市教育委員会	
11	〃 五五年	藤本史子	黒川古文化研究所	嘱託
13	〃 五七年	津田美智子	(財)東大阪市文化財協会	
15	〃 五九年	井西貴子	大阪府教育委員会	技師
15	〃	細川佳子	伊丹市教育委員会	嘱託
17	〃 六一年	西川真美	愛媛県埋蔵文化財調査センター	
18	〃 六二年	山上真子	尼崎市教育委員会	嘱託
21	平成 二年	赤松和佳	大手前女子大学、文化財調査室	調査員、日比野ゼミ
21	〃	礒部敦子	兵庫県埋蔵文化財調査事務所	
21	〃	東口智子	尼崎市教育委員会	
22	〃 三年	石田幸子	(財)大阪市文化財協会	調査補助員
22	〃	岡野理奈	伊丹市教育委員会	
22	〃	矢島馨	兵庫県埋蔵文化財調査事務所	非常勤嘱託員
23	〃 四年	竹村三奈	高知県文化財団埋蔵文化財センター	

24	〃 五年	木南アツ子	芦屋市教育委員会	嘱託
24	〃	谷本良子	羽曳野市教育委員会	
24	〃	山崎晴世	小浜市教育委員会	
24	〃	藤井文子	(財)東大阪市文化財協会	切畑ゼミ
25	〃 六年	石神由貴	三田市教育委員会	臨時技術員
25	〃	川上啓子	大手前女子大学、文化財調査室	調査員
26	〃 七年	小出匡子	〃 〃	〃 秋山ゼミ
26	〃	渡邉晴香	〃 〃	〃
26	〃	中島薫	兵庫県三原郡教育委員会	
27	〃 八年	井上知香	猪名川町教育委員会	
27	〃	佐藤由美	大手前女子大学、文化財調査室	宮川ゼミ 調査員
27	〃	高木愛子	尼崎市教育委員会	秋山ゼミ
27	〃	田中万紀子	東大阪市立郷土博物館	学芸員

これらの人材のほか、各地で活躍している文化財関係者と結婚し、家庭にあって研究活動を支えている者のいることも知っている。共に更なる活躍を祈りたい。

なお末尾に本学を卒業後、大学院に進学して所定の課程を修了、あるいは在学中の藤井ゼミ出身者名を掲げておきたい。

期	卒業年次	氏名	大学名
11	昭和五五年	藤本史子	大阪市立大学
19	〃 六三年	山川公美子	立正大学
24	平成 五年	長田芳子	神戸女子大学
27	〃 八年	河向井瑞紀	大手前女子大学